代表社員
藤田考晴 さん

東京工業大学工学部卒。同大学大学院理工学研究科修了。株式会社デンソーの基礎研究所で研究に従事後、大手特許事務所に入所。1998年、弁理士資格取得。約8年の実務経験を経て、2003年「オリーブ国際特許事務所」設立。2024年、弁理士法人化。2025年『弁理士法人IP CREW』に社名変更。

AI特許の世界動向 応用分野で強みを持つ日本企業

幅広い分野で生まれる新たなAI関連発明

AI技術の発展に伴い、AIそのものの技術開発や既存産業と組み合わせた応用技術の開発が進んでいる。今回は、AI発明に関する特許の出願傾向や世界的な動向などについて、『弁理士法人IP CREW』代表社員の藤田考晴さんにお話を伺った。

―AI関連の発明には、どのような種類があるのでしょうか。

「AI関連の発明には、おおまかに分けると、ディープラーニングなどの機械学習を用いたモデルなどのAI技術そのものに関する発明とAIに具体的なシステムやサービスを組み合わせた応用発明の二つのタイプがあります。特許出願件数としては、AI技術そのものよりも、自動車の自動運転技術や医療診断支援、創薬探索といった幅広い分野で、AIと具体的な装置やシステムを組み合わせた応用発明が多く生まれています」

弁理士法人 IP CREW
アイピー クルー
045-640-3253
olive@olive-pat.com
神奈川県横浜市西区みなとみらい2-2-1 横浜ランドマークタワー37F
http://www.olive-pat.com/

―世界的に見るとAI関連技術の特許取得にはどのような傾向がありますか。

「特許出願件数で見ると、最も多いのは中国です。次いでアメリカ、その後に韓国、日本、ヨーロッパ、インドなどが続きます。中国では国がAI特許の出願を強く支援していることもあり、出願数が非常に多く、世界全体のAI特許の約7割を占めています。一方で、アメリカはGoogleやMicrosoftなどの大手IT企業がAIの基礎研究に積極的に取り組んでおり、AIの基礎技術に関する発明が多いのが特徴です。アメリカでは、誰もが使いたくなるような影響力の高い技術が生まれており、AI技術の発展を牽引しています」

―日本の強みとしてはどのようなものがありますか。

「日本では、AIの応用分野に強みがあります。日本がもともと得意としてきたものづくりの分野にAIを組み合わせた発明が多く見られます。日本企業は、工場の加工データや製造データなど、現場で長年蓄積してきた豊富なデータを活用し、AIを使った品質管理や生産効率の向上などの実用的な技術開発が進めやすい環境にあります」

―今後AI関連の特許はさらに増えていくのでしょうか。

「私のもとにもAIに関連する発明や特許出願についての相談が増えており、今後ますますAI関連の特許が増えていくのではないかと考えられます。AI技術そのものだけでなく、既存の産業やサービスと組み合わせた新しい発想が、これからの発明の重要なポイントになっていくのではないでしょうか」

（ライター／彩未）